宿題や家庭学習を行なう「山田町ゾンタハウス」

中学生たちに〈軽食支援〉を

パンを食べてから自習室へ

陽が落ちてあたりがすっかり暗くなった頃、お腹をすかせた中学生たちが「山田町ゾンタハウス」に集まってきます。1階奥の和室で野球のユニフォーム姿の男子たちがパンを頬張っていると、チームメイトとおぼしき少年が少し遅れてやってきました。

彼は台所でトーストを焼いているスタッフに「今日のパンはなんですか？」と聞きました。「ウィンナーサンドとたまごパンのクロワッサンよ」とスタッフが答えると、彼は少し悩んでからウィンナーサンドをとり、渡されたパックジュースを手に、野球部の仲間の輪に加わりました。そして、食べ終わった子から順に2階の自習室へと上がっていきます。

岩手県下閉伊郡山田町にある山田町ゾンタハウスは、学校帰りの中学生が立ち寄ってパンなどの軽食を食べ、宿題や家庭学習を行なうスペースです。2011年9月に開所しました。もともとは葬祭場として使われていたこの建物、1階部分は被災しましたが、女性の地位向上をめざす世界的組織「国際ゾンタ」から、2年分の運営費と改修費合わせて1,500万円を援助を受け。NPOこども福祉研究所（森田明美理事長［東洋大学教授］）山田支部が運営しています。1階には街かどギャラリーも併設し、子どもたちだけでなく住民も気軽に立ち寄る憩いの場となっています。

パンやトースト、飲み物には個数制限がある。開家に帰ったらちゃんと晩ごはんを食べてほしいという思いから。

岩手県生活協同組合連合会（以下、岩手県生協連）が山田町ゾンタハウスに関わるようになったのは、森田さんからの相談がきっかけです。利用を呼び掛けるために共同購入（宅配）の組合員さんや学校生協の先生たちにチラシを配布しました。また、育ちざかりの中学生はいくら食べてもお腹が減る年頃。学校帰りに勉強しながら親の迎えを待つ子どもたちに食べさせる軽食は必須です。そこで岩手県生協連が窓口となって日本ユニセフ協会と交渉。軽食・おやつ費用の支援をとりつけました。子どもたちはパンやトースト、飲み物をお腹に入れたあと、勉強できるのです。サンドイッチにはさむ食材やトーストに塗るマーガリン、ジャム、飲み物全般、衛生用品などはいわて生協の共同購入を利用しています。

ところが日本ユニセフ協会の支援期限が迫ってきました（2012年12月末まで）。岩手県生協連 専務理事の吉田敏恵さんは、軽食・おやつ費用の支援を各方面に呼び掛けています。

安心して勉強できる居場所

子どもたちはどんな様子なのでしょうか。2階の自習室をのぞいてみます。2階の自習室に上がる階段には「ここからしゃべらない！」「飲食禁止」といった貼り紙がありました。2階は30畳ほどのスペースで、40人分の机と椅子が並べられています。この日はほぼ満席。山田町ゾンタハウスの代表を務める竹内範子さんと実務責任者の佐藤恵理子さん、そのほか3人のスタッフは添削をしたり質問を聞いたりと忙しそうです。

竹内さんは公文式の指導者です。その教え子の１人が森田さんの大学の教え子であった縁から山田町ゾンタハウス設立につながりました。竹内さんは地域の高齢者にお弁当を届けるグループ活動を震災前に行なっていましたが、山田町の小・中学校には給食がなかったため、震災後は子どもたちの栄養状態がとても心配でした。

「給食がないうえ、被災したご家庭は住まいや仕事のことで落ち着かないため、子どもたちの食事まで気が回らない状態でした。コンビニエンス・ストアの前で朝ごはん代わりに買い食いしている子たちの姿もありました」（竹内さん）

当初は給食事業を目指したものの諸事情により断念。方向転換して考え出したのが、中学生の居場所づくりでした。「小学生には学童保育がありますが、中学生には学校と仮設住宅しかありません。仮設住宅は狭くて落ち着いて勉強できないので、ちょっとした学習ができる場所をつくろうと思いました」と竹内さん。地元の雇用の受け皿だった魚介類の加工場が軒並み津波で流されたため、「今まで以上に学力の底上げが大切だ」という切実な思いもあります。

自習が中心とはいえ、わからないところがあれば竹内さんや佐藤さん、そのほかスタッフに教えてもらえる。

山田町ゾンタハウスの登録者数は209人。1日平均20～25人が利用していますが、子どもたちにとってパンなどの軽食は大きなインセンティブになっていると言うのは佐藤さんです。

「子どもたちは食べることをとても楽しみにしています。もちろん食べ逃げはNGで、最低30分勉強することを義務づけています（笑）。だからこそ『ただいまー』と帰ってくる子どもたちに『はい、おやつよ！』と渡してあげることは続けていきたいのです」（佐藤さん）。

山田町ゾンタハウスは数多くの企業・団体から支援を受けています。たとえば山崎製パンは毎週40斤もの食パンを無償で提供。学研教育出版や東京書籍などは参考書や問題集を大量に寄贈しています。コープとうきょうも、昨年、ガスエアコンを贈り、大変喜ばれました。東洋大学からは、立ち上げのための整備、学習支援など継続的な学生たちのボランティアが入っています。

吉田さんは「親への依存から自立へと移りゆく中学生は微妙な年ごろです。だからこそ

温かな気持ちをもつ大人たちがさまざまなかたちで支えることは、彼らの社会性を育むことにもつながるはずです」と支援の重要性を強調しています。

自習室に目を転じると、分からないところを相談しながら真剣に勉強していたはずなのに、いつの間には友だちとじゃれて笑い合う中学生たちの姿がありました。狭い家のなかで1人勉強するよりも断然ここの方が楽しいはずです。中学3年生はこれから本格的な受験準備に入ります。山田町の子どもたちが安心して勉強できる居場所を守るために、軽食・おやつに関する支援をぜひご検討ください。